

書評

大内 力

『経済学方法論』

(大内力経済学大系 第1巻)

東京大学出版会 1980.3 360ページ

宇野弘藏編『経済学大系』全8巻(経済学方法論, 経済学原理論(上, 下), 帝国主義論(上, 下), 世界経済論, 日本経済論(上, 下)——1960-65年刊行)は, 宇野教授の提唱した経済学体系の三段構成(原理論, 段階論, 現状分析)の全領域を含むものであって, 宇野学派の確立をつける画期的なシリーズであった。宇野教授がこのために執筆された『経済学方法論』は, 氏の成熟期の代表作ともいえる名著である。この『大系』に『日本経済論』を担当された大内教授は, このたび『経済学大系』の全巻を1人で執筆するという前人未踏の野心的な企画をたてられ, その最初の巻として刊行されたのが本書である。本書は大枠としては宇野『方法論』を踏襲しながらも多くの点で著者独自の見解を展開している。その点に焦点をすえて, この書評を進めることとしよう。

[1] 宇野『方法論』は, 「経済学の対象」, 「経済学研究の分化」, 「経済学と唯物史観」, 「『資本論』における方法論上の諸問題」の4章構成をとっているのに対して, 大内『方法論』は同じ4章構成であるが, 「経済学の課題と体系」, 「原理論の方法」, 「段階論の方法」, 「現状分析の方法」となっている。後者は宇野『方法論』の前半2章, なかなく, 「経済学研究の分化」で説かれていることを, 原理論, 段階論, 現状分析のそれぞれにわけて詳論したものである。そして, 宇野『方法論』の後半2章に当る部分は大内『方法論』にはない。宇野『方法論』で『経済学と唯物史観』や『『資本論』における方法論上の諸問題』が論ぜられるのは, 原理論の純化が段階論や現状分析の区分の必要性を逆照射するという宇野教授の発想にもとづくものであった。大内『方法論』でそれらが欠落しているのは, おそらく, 原理論の純化をめぐる諸問題は, 自分で執筆するそれぞれの巻で論ずる予定であるためであろうと思われるが, そこにはやはり, 新しい方法論の開拓者と, それを基本的に受入れそれから「せめて半歩」なりとも前進しようとする者との立場の相違がある。この相違が本書全体の性格を律している。

[2] 本書第2章「原理論の方法」は本書中宇野『方法論』に最も忠実な部分であり, 宇野原理論に対して異説をとらえた「世界資本主義論」に対する批判に多くの

ページがさかれている。けれども, 宇野教授ならば方法論の問題として取上げて論じたであろう論点が, 注において問題の指摘にとどまっているのが筆者のみたかぎりでも2点ある。

第1は, 宇野原理論の最終篇「分配論」の性格づけの問題である。「原理論は資本主義経済の循環運動を純粋に取出して, その法則性を解明する」ものであり, その最終篇の課題は「個別資本の利潤追求の競争的運動が, 諸資本の社会的編成を実現しつつ, この[資本の物的および階級的]再生産を継続させてゆく過程」の解明であると考え大内教授は, 「この最後の篇を『分配論』とよぶことが適当であるかどうかは多少の疑問が残る」として, 「『資本論』にならって『総過程論』とでもいったほうがいいのかもかもしれない」と考えるのであるが, 「それを分配論とよんでおくのは, 慣習の便宜にしたがったまでのことである」とされる。

第2は, 原理論のなかで恐慌=景気循環をどのように説くかという問題である。大内教授はそこに「厄介な問題」が存在しているとして, 幾つかのオルタナティブがあることを指摘しながら, 「ここでは景気循環=恐慌は, 原理論の生産論・分配論のうちにとりこまれられており, そのなかで解明されるべきものと考えておく」とされる。

以上の2点は, 筆者の考えでは, 続刊される『経済学原理論』で本格的に論ずるための伏線として言及しておけばよいといったものではなくて, 原理論の対象である「純粋資本主義」の基本的な枠組と性格にかかわる論点であって, 原理論の方法として是非論じておかねばならぬものである。宇野原理論の「分配論」を「総過程論」として循環機構論に組替えてゆくのは「世界資本主義論」派の原理論に特徴的な方向性であって, この方向性を大内教授は基本的に受入れているために, 「世界資本主義論」派の原理論については, 「結果としての原理論の論理展開に必然的な差異をもたらしているようには思われぬ」という折衷的な評価にとどまっている。原理論の展開方法およびその完結性について異なる見解をもつ「世界資本主義論」派の原理論が「結果として」同じように見えること自体が問題である(そこに方法論上の差異が反映せざるをえない)のであるが, 大内教授はこの点については過度に寛容であるために, 本書第2章で行なわれているかなり手厳しい「世界資本主義論」批判も部分的かつ不徹底に終わっているように思われる。

なおここで大内『方法論』は, 「原理論体系の暗黙の前提とでもいえるべき一定の生産力水準」を「資本主義の

変質」が原理論に反映される要因として強調している点を付言しておこう。これは原理論の世界を歴史的に相対化するものであって、つぎで考察する「段階論の方法」と関連する。

[3] 「原理論の方法」を離れると、大内『方法論』は宇野方法論と大きく異なってくる。本書第3章「段階論の方法」は、宇野段階論批判が軸となって展開される。宇野段階論はタイプ分析——資本主義の各発展段階の特徴を、その段階を主導する典型国の典型産業、典型資本の分析によって明らかにする——を基本としていた。これは、段階論では法則的説明は不可能であるという判定に基づく。典型国自体歴史的事実によって与えられるとしたのもそのためである。大内段階論はこれを全面的に否定する。大内教授によれば、資本主義の動態は「循環運動と歴史運動の合成」であるが、宇野教授とは異なって歴史運動にも「一定の法則性」があり、それを説明するのが段階論の課題であるという。そして、段階論自体の「体系の完結性を予想することは可能である」とまでいわれている。

大内教授が資本主義の歴史運動の法則的説明として提示するのは、複線の発展論である。すなわち、資本主義の各発展段階には、それぞれ「積極的な典型」と「消極的な典型」とがあり(自由主義段階では前者がイギリス、後者がドイツである)、両者の相克・葛藤によって資本主義の史的発展のダイナミクス＝「段階移行の必然性」が明らかにされるといふ。そして、「帝国主義段階論のなかにドイツがいわば降って湧いたように登場する」ところの「宇野博士のような方法では、資本主義の生成・発展・変質の運動法則を明らかにするという課題に十分に答えることは不可能であり、ただ平面的にそれぞれの段階の特徴が並列されるということになりかねない」と宇野段階論の核心を批判されるのである。筆者はこの批判には同感である。だがこのことは、大内教授自身が依拠している宇野教授の経済学体系の三段構成論に深刻な影響を与えずにはおかないように思う。問題点はつぎの如くである。第1、原理論と段階論の関係についてであるが、教授の考え方はエンゲルスのいう「狭義の経済学」と「広義の経済学」の並列を資本主義の史的発展のなかで説くことになりはしないだろうか。原理論自体一定の生産力水準を前提とする以上、少なくとも、自由主義段階においては原理論と段階論の相違は、一国分析か世界経済論かという分析視角の差に帰着せざるをえないように思われる。第2、つぎのべる現状分析についての大内教授のユニークな見解を考慮すれば、教授の段階

論は過去の日付をもった現状分析と等しいものになってしまうように思われる。現状分析の史的系列と質的に区別される段階論が根拠づけられているか否かは筆者は大いに疑問とする。この点との関連で「世界資本主義論」派の段階論不用論の検討がなされていないのも筆者の理解を超えるところであった。

[4] 宇野『方法論』では現状分析は各国資本主義の特殊性を明らかにするものとされていたが、大内『方法論』では特殊性分析のほうは希薄化されて、現時点での現状分析は国家独占資本主義論であるとされている。そして、現状分析の方法として、一定の作業仮説をたて、それを検証する「抽象的・一般論としての国家独占資本主義論」を大内教授は積極的に肯定する。事実、教授が展開されている国家独占資本主義論は、各国の国家独占資本主義の特殊性を明らかにしようとするものではなく、国家独占資本主義を「抽象的・一般論」として論じたものである。このことを筆者は大いに歓迎するけれども、「抽象的・一般論としての国家独占資本主義論」が、『大内経済学大系』中の『日本経済論』におけるわが国経済の特殊性分析に対してどのような意味を持つかは「現状分析の方法」として明らかにして欲しかったように思う。

[5] 以上からもわかるように、大内『方法論』は宇野方法論を大枠としては継承しているが、それはもはや宇野方法論の祖述の域を超えて独自のものとなっているといつてよい。むしろ本書は、今後刊行される『大内経済学大系』の方法論をのべたものと解すべきであろう。本書のユニークな点は今後展開される大内経済学のユニークさを十分に予想せしめるものである。経済学の方法はその具体的適用との間に円環的關係が成立するばあいにもみ有効であるから、ここでのべた筆者の疑問も『大内経済学大系』の中でそれぞれ解答が与えられるものと思われる。その完結に大いに期待したい。だが、それにしても、せめて大内経済学大系の構図はこの『方法論』で明らかにしておくべきではなかったろうか。それ自体が経済学方法論の重要問題の1つである。そして経済学大系を1人で執筆される著者であれば、そのことは十分に可能なはずであった。

[高須賀義博]